

まき網漁業の概要

境漁港は浮魚水揚量が全国的に見ても多く、その大部分が「まき網漁業」によるものです。漁船の大きさ（トン数）により「大中型まき網」と「中型まき網」に分けられ、主に鳥取・島根の大中型と島根（隠岐）の中型が水揚げをしています。夏のマグロのシーズンには、石川、長崎、東京等の船団も加わり、より一層にぎやかになります。

【魚種】 マアジ、マサバ、イワシ類、ブリ、クロマグロ等

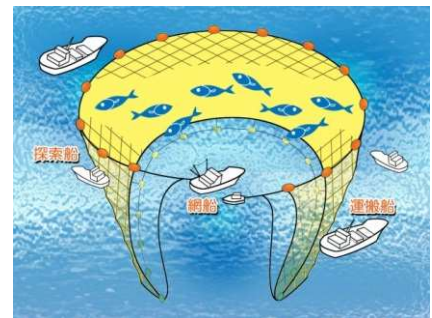
【漁場】 隠岐・浜田周辺：アジ、サバ、イワシ類など

日本海中西部：ブリ、クロマグロ

【隻数】 境港に水揚げする主な船団数

大中型：4船団 中型：8船団

※マグロの時期は船団数も増加します。

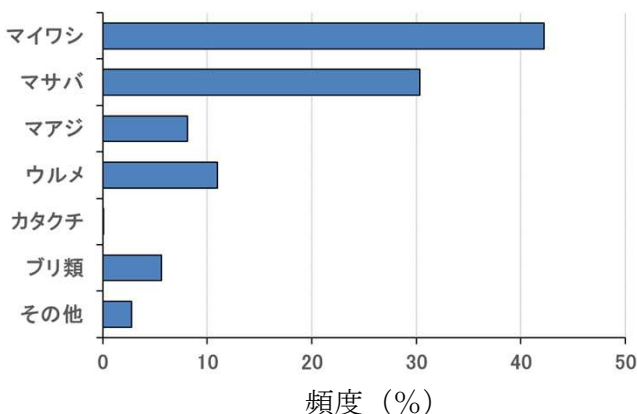


【漁法】 「まき網漁業」は長方形の大型の網を円形状に張って行き、魚群を取り囲む漁法で、船型の異なる複数の船が船団を組んで操業を行います。大中型まき網の場合は、一般に網船1隻、探索船2隻、運搬船2隻の合計5隻で1船団が構成されています。

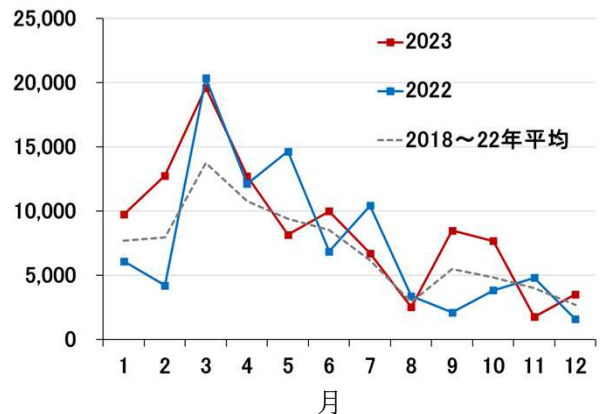
水揚の状況

2023年の境港におけるまき網漁業全体の水揚量は103,708トンでした（前年比:115%（前年90,497トン）。魚種別にはマイワシ（42%）が最も多く、次いでマサバ（30%）、マアジ（8%）、ブリ（5%）の順となっていました。月別では5、8、11月を除く各月で平年を上回る水揚げがあり、6年ぶりにまき網漁業のみで水揚量10万トンを突破しました。

境港のまき網水揚割合



月別水揚量の比較



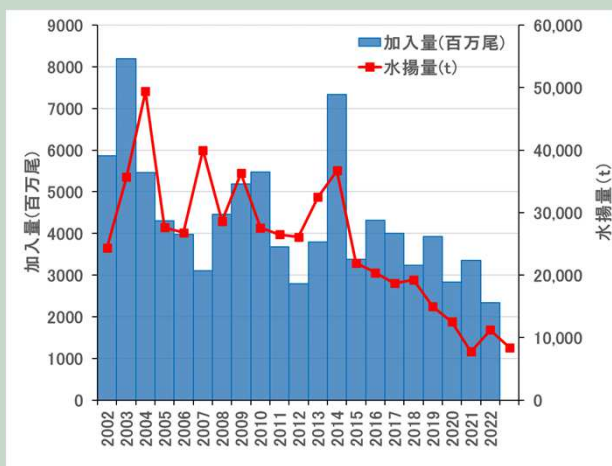
現状の課題と解決に向けた試み

マアジの水揚量と新規加入量調査について

2023年の境漁港におけるマアジ水揚量は8,404トンとなり、前年から2,834トン減少し、過去5年の平均水揚量と比較すると64%と低水準の水揚げとなりました。また、境漁港では、2014年（36,712トン）以降、長期的な水揚量の減少が継続しています。

この長期的な減少の原因はまだ解明されていませんが、考えられる1つの要因として、再生産が年々悪くなっていることが考えられます。下図のとおり、2014年以降、加入量（その年生まれの当歳魚の量）は、この10年、減少傾向にあり、境港のマアジ水揚量の動向と一致しています。なお、この加入量を算出する資源評価は（国研）水産研究・教育機構（水研）が行いますが、水産試験場ではその算出の基となる当歳魚の分布状況を定量的に把握する「マアジ新規加入量調査」を、関係機関（水研、山口県、島根県）と協力して、2003年から実施しています。

加入量は、産卵に参加する親魚量や海洋環境を始めとしたさまざまな要因により大きく変動します。現在、加入量の減少が継続しているものの、マアジ対馬暖流系群の資源量は安定した状態にあると推定されていますが、この低加入が今後の資源評価に悪影響を及ぼすことは明白です。資源評価の精度向上を行うためにも、引き続き本調査を継続するとともに、調査精度の向上も必要となります。2023年調査では、当歳魚の分布が従来より東側に移動していないかを確認するため、調査範囲・調査点を東側に拡大し、調査を実施することを開始しました。精度の高い資源評価は、資源管理には必須のものとなりますので、引き続き水産試験場ではこれに努めていきます。



加入量と水揚量の推移



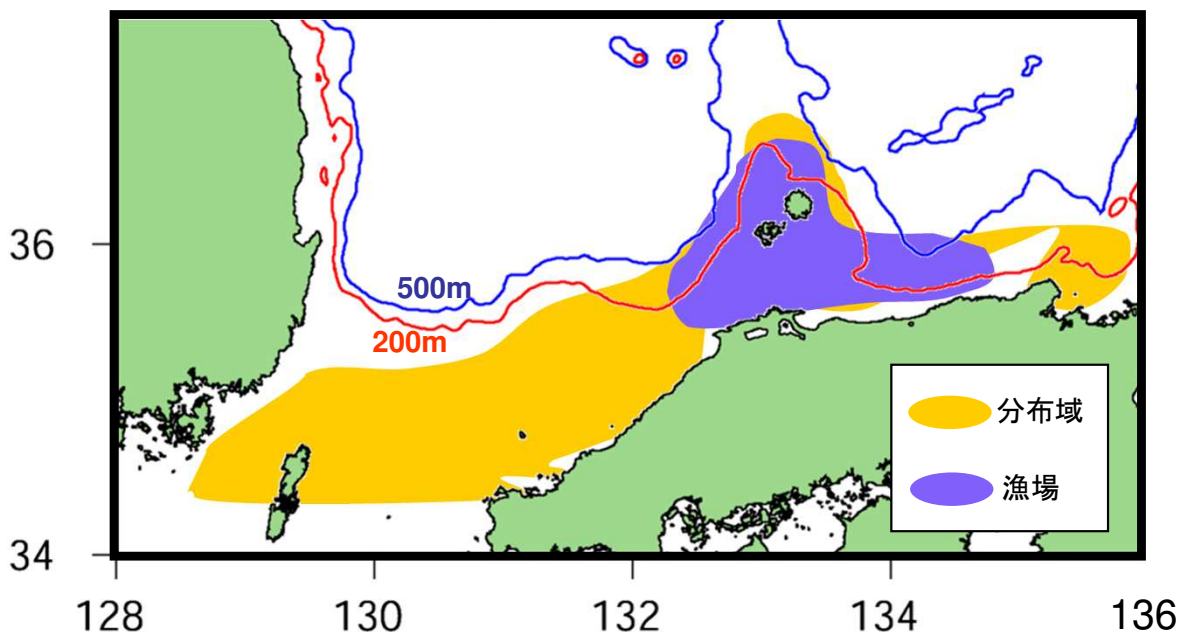
調査の様子

マアジ (市場名 ヒ)



生態

【分布】 南シナ海～北海道まで各地。日本海側では長崎県、島根県の漁獲が多い。群れで生活することが多く、沿岸から沖合の主に浅所を遊泳する。昼は海底近くにいるが、夜になると海の表面近くまで上がってくる。

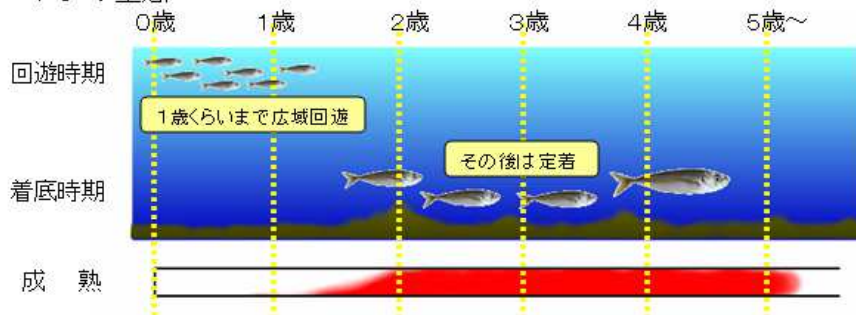


【成長】 通常、寿命は5歳前後と考えられている。最大で尾叉長50cm程度まで成長する。

【成熟と産卵】 早いもので1年、概ね2～3年で成熟する。西日本の産卵期は1～6月。通常、南ほど早く、盛期は3～5月。東シナ海、九州沿岸、日本海沿岸で直径約1mmの卵を産む。

【食性】 シラスなどの小魚や小型甲殻類などを摂餌。

マアジの生態



漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では主に大中型まき網により漁獲される。沿岸域では定置網漁業、刺網漁業による漁獲が多い。

【漁期】 周年漁獲される。鳥取県周辺では初夏のころに脂がのる。

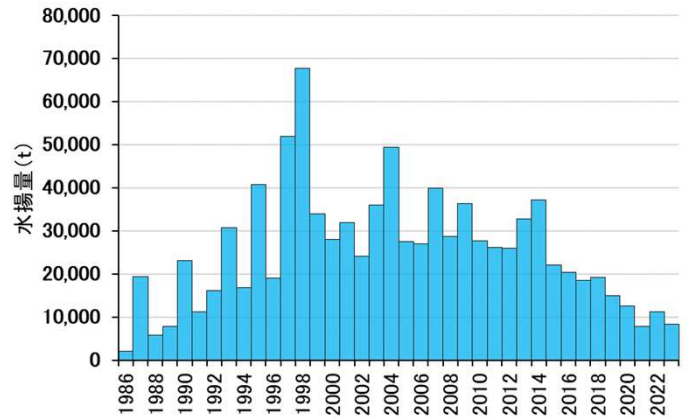
漁獲状況

低位・減少

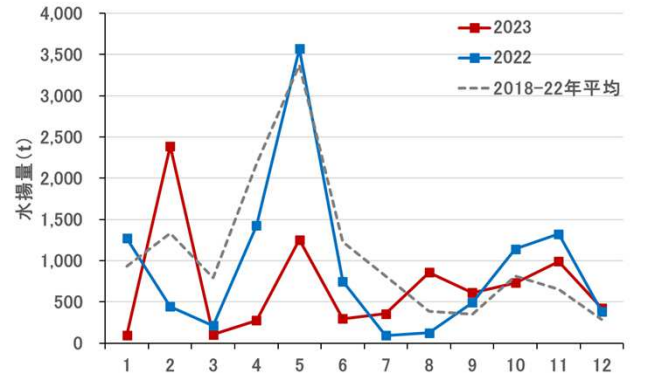


2023年の年間の水揚量は8,404トンでした。昨年は1万トンをこえる水揚げがあったものの、今年は過去30年で最低を記録した2021年と同程度の低調な漁獲量となり、近年の長期的な減少傾向が継続した形となりました。

月別に見てみると、2月と夏季以降に関しては、平年を上回る月が多かったものの、近年の主漁期にあたる4～6月にかけての水揚量が大きく減少しました。日本海マアジは資源状態は良いとされているものの漁獲量は減少しています。この乖離の原因を探ることが今後の課題と考えています。



境港のまき網におけるマアジ年間水揚量の推移



境港のまき網におけるマアジ月別水揚量の比較

マアジ以外のあじ類の資源評価にも参画しています

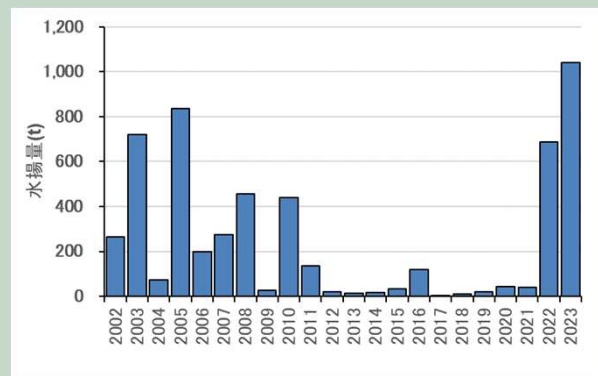
境港でアジと言えばマアジ (*Trachurus japonicus*)を指しますが、実はよく観察してみるとマアジ以外のあじ類が混ざっていることがあります。代表的なものに境港ではあおあじと呼ばれるマルアジ (*Decapterus Maruadsi*)、まれにモロ (*Decapterus macrosoma*)などを見かけます。

これらの魚種はムロアジ属に分類され、南方性で資源評価は西海ブロック (九州エリア)で行われていましたが、記録を遡ってみると境港において少なくとも2002年から水揚げが確認されています。また、ムロアジ属に関しては今年の水揚量が1,041トンとなり、2002年以降もっとも多くなりました。

このような状況もあり、オブザーバー参加に留まっていたマルアジに関しては令和4年度から資源評価機関として参画、モロに関しては引き続きオブザーバーではあるものの測定・サンプリングを行っています。今後も資源評価精度の向上に寄与していきたいと思えます。



上からモロ・マルアジ・マアジ



ムロアジ属の水揚量の推移

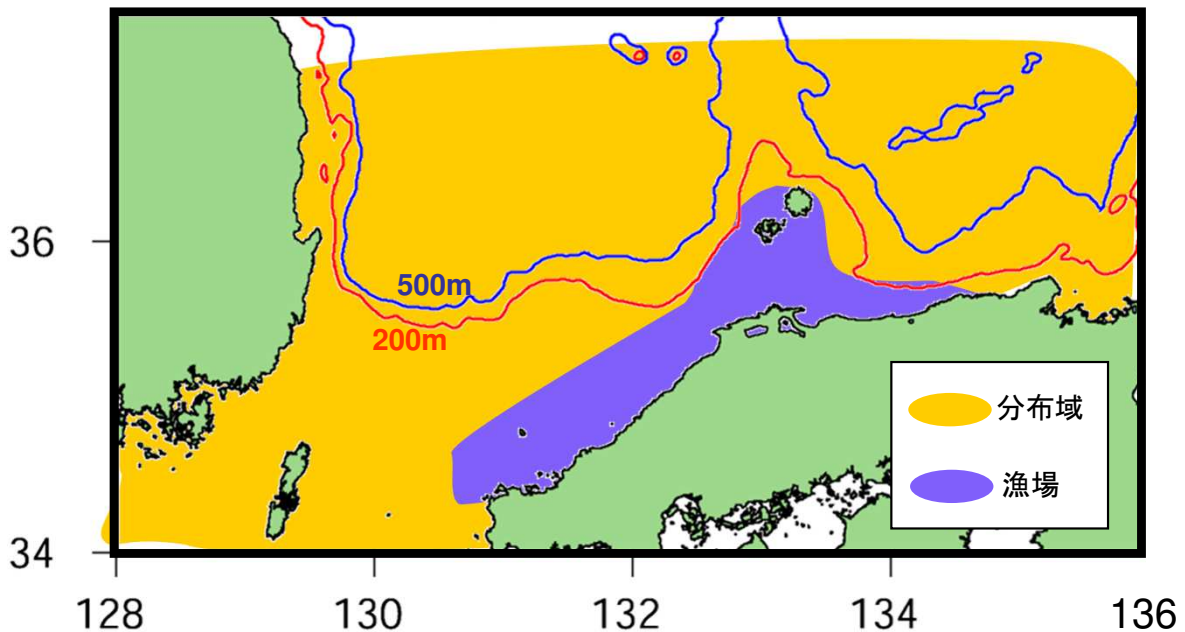
マサバ (市場名 メ)



生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域。

日本海側の系群は夏季に索餌のため北上し、秋季から冬季に産卵・越冬のため南下するとされる。



【成長】 寿命は6歳前後と考えられ、最大で尾叉長50cm程度まで大きくなる。

【成熟】 成熟年齢は1歳で半数、3歳で完全に成熟する。春季に東シナ海から日本海西部の沿岸域で産卵する。

【食性】 カタクチイワシ等の魚類やオキアミ、アミ、カイアシなどの甲殻類を摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では大中型まき網、一本釣、刺網漁業により漁獲される。水揚量のほとんどはまき網による。

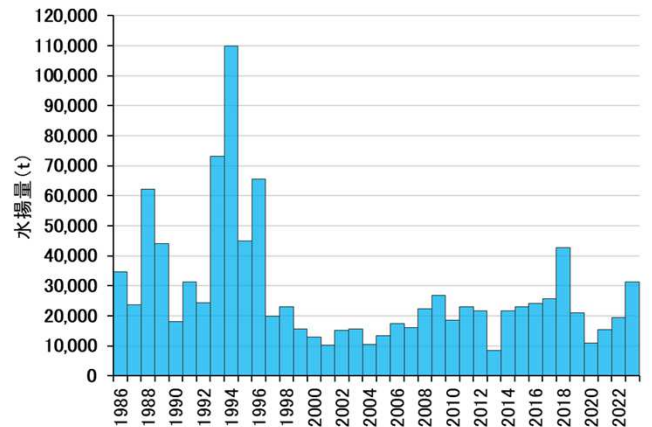
【漁期】 まき網では、秋から冬に多く漁獲され、刺網では春に漁獲される。

漁獲状況

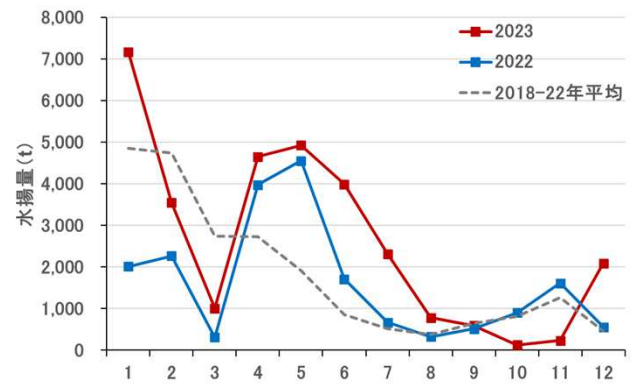
中位・横ばい

2023年の水揚量は31,425トンで、前年比162%、平年比143%となりました。年別の傾向をみてみると、2018年（4.2万トン）～2020年（1.1万トン）にかけて水揚量が減少していましたが、2021年以降、水揚げ量が回復傾向にあります。また、昨年同様に春季に好漁となり、主漁期である冬季（1月・12月）にも平年を上回る水揚げ量がありました。

体長組成は例年と同様に0・1歳魚を中心に水揚げされました。2018年以降は、尾叉長30cmを優に上回る2歳魚以上の水揚げも顕著に見られるようになってきており、2023年も近年と同様に大型魚がよく見られました。



境港のまき網におけるマサバ年間水揚量の推移

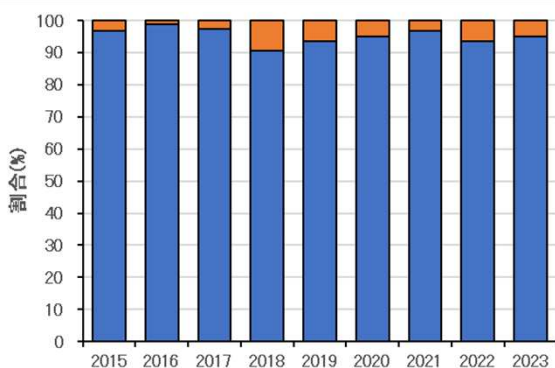


境港のまき網におけるマサバ月別水揚量の比較

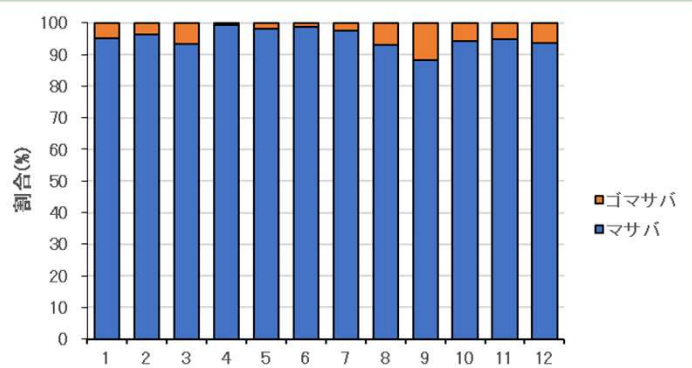
近年の境港におけるゴマサバ漁獲状況

境港に水揚げされるさば類にはマサバとゴマサバがあり、ゴマサバは比較的暖かい海域で多い種です。水産試験場では、2015年より測定の際にマサバとゴマサバの種判別を行っており、8年分のデータが蓄積されていますので、そこから年別・月別の漁獲割合をご紹介します。

まず年別に見ると、2018年以降、ゴマサバの割合がやや高い状況が続いている傾向にあることが分かってきました。年によって差はありますが、例えば最も多かった2018年ではおよそ10%であり、2018年はサバ類の水揚げが特に多かった年なので、水揚量で換算するとゴマサバだけで4千トン超の水揚げがあったこととなります（2023年のゴマサバ割合は4.9%で水揚量に換算すると約1500トン）。また月別に見ると、夏～秋期に比較的多い傾向があることもわかってきました。こうしたデータの蓄積・解析によって、資源評価の高精度化に積極的に関わっていければと思います。



年別さば類水揚割合



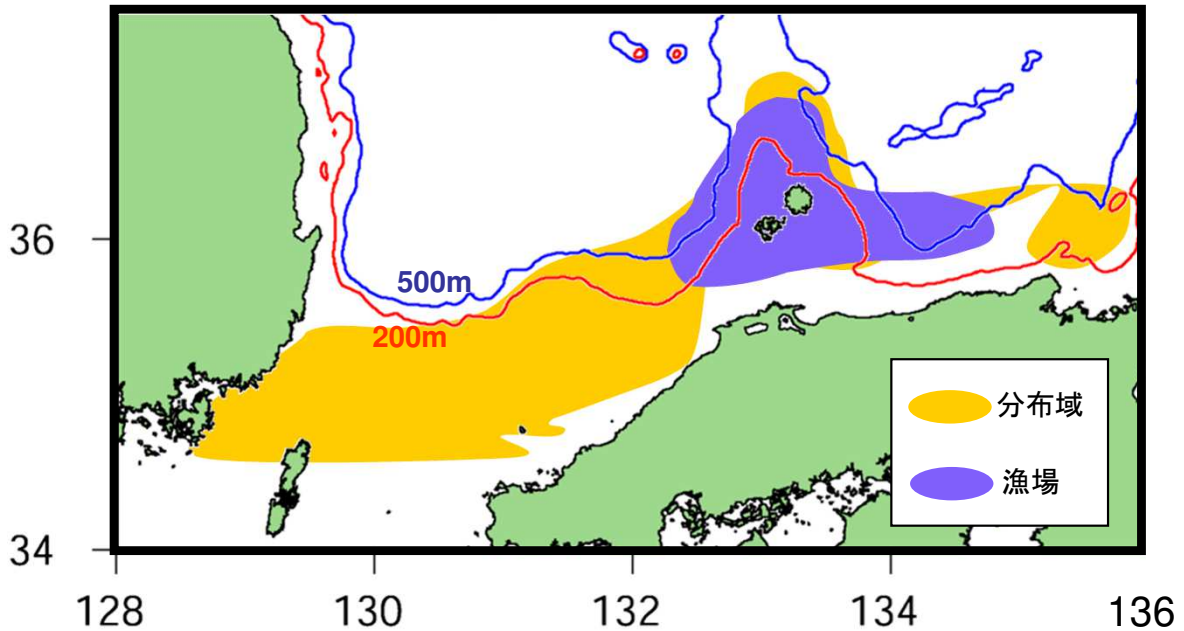
月別ゴマサバ水揚割合(2015～23年平均)

カタクチイワシ (市場名タレ)



生態

【分布】 日本周辺の沿岸域。



【成長】 寿命は2歳と考えられ、最大で体長15cmくらいまで大きくなる。

【成熟】 満1歳で成熟し春季～秋季にかけて、東シナ海から日本海各地の沿岸域で産卵すると考えられている。

【食性】 カイアシ類などの動物プランクトンを主に摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 成魚は主に隠岐諸島のまき網により漁獲され、境港に水揚げされる。一方、シラス（稚魚）や幼魚は船曳網、すくい網などにより主に美保湾周辺の沿岸域で漁獲されている。

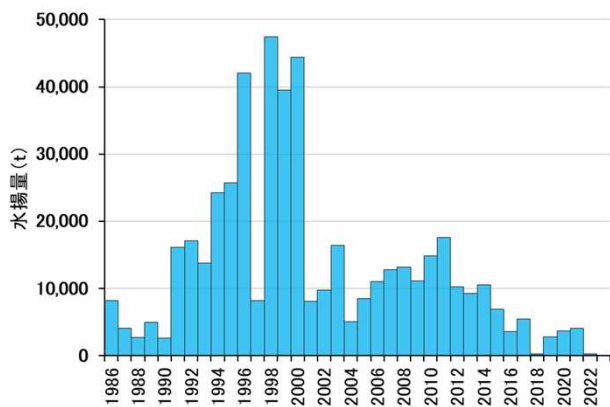
【漁期】 周年水揚げされるが、春と秋に多く水揚げされる。春に水揚される個体のほとんどが体長の大きな産卵親魚である。

漁獲状況 低位・減少

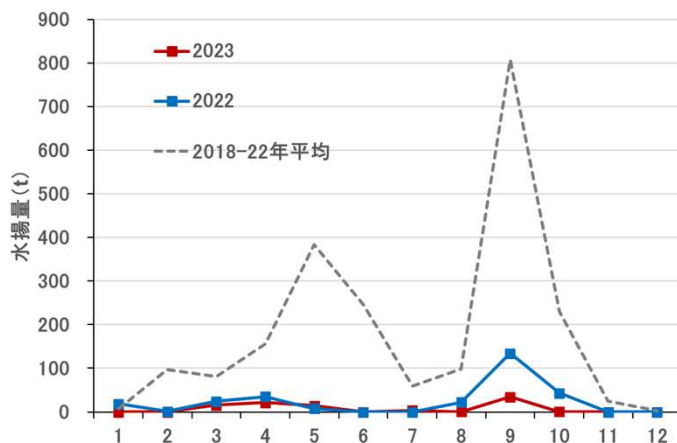


資源状態は近年、低い水準で推移してきており、境港での水揚量も2012年以降減少傾向にあります。2023年の水揚量は90トンで、前年・平年を大きく下回り、過去30年で最も少ない水揚量となりました。

本種は令和3年度から新ルールでの資源評価が行われており、最新の令和5年度評価では親魚量は横ばい傾向と推定されました。そして、親魚量はMSY水準を下回っており、その回復のために高い漁獲圧を下げる必要があるとされています。境港においては、ここ近年他魚種を狙うことで漁獲圧を低下させるようになってきています。なお、2024年から本種に加えウルメイワシにおいてもステップアップ方式でのTAC管理がスタートしています。



境港のまき網におけるカタクチイワシ年間水揚量の推移



境港のまき網におけるカタクチイワシ月別水揚量の比較

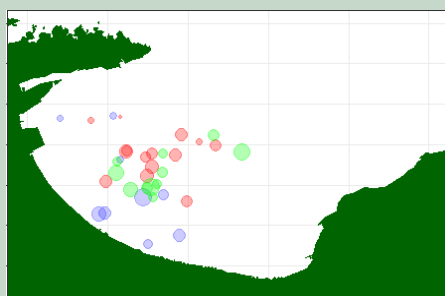
美保湾におけるカタクチイワシの調査

カタクチイワシは沖合だけでなく沿岸においても重要な魚種です。特に県西部に位置する美保湾においては、古くからすくい網や船曳網で盛んに水揚げされています。

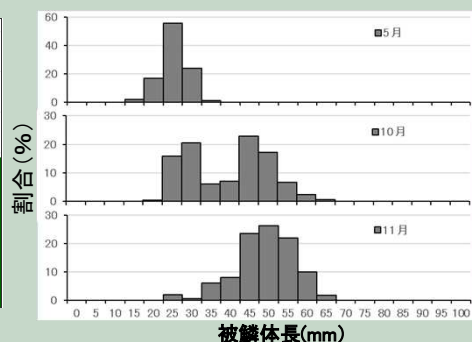
しかし、その水揚量は増減が激しく、持続的・安定的な漁獲を続けるために資源動態の把握が求められており、当試験場は平成30年度から美保湾のカタクチイワシ調査を継続して行っています。調査では船曳網、すくい網漁業者の方々に標本船野帳の記入やサンプル提供等にご協力いただきながら、体長組成の把握や漁場の移り変わりなど、新たなことが少しずつわかってきました。今後もデータを蓄積し、引き続き資源動態の把握等の検討を進めていきたいと思ひます。これからも調査への御理解・御協力をよろしくお願いいたします。



船曳網によるカタクチイワシ水揚げ風景



標本船調査による漁場図



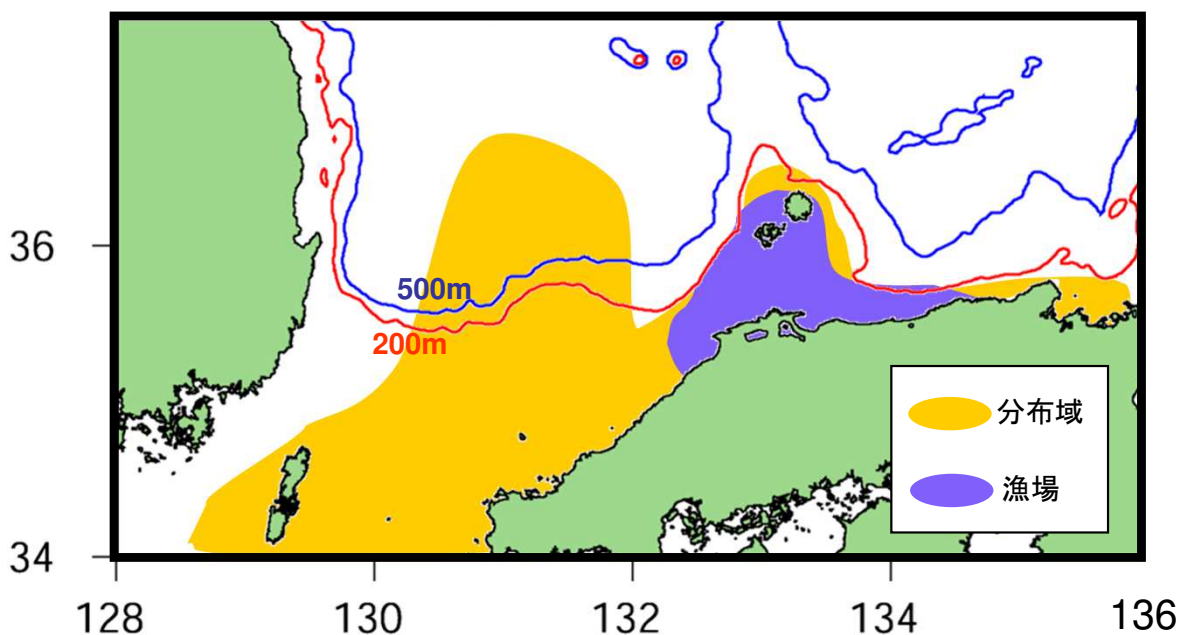
カタクチイワシ月別体長組成



マイワシ (市場名 ツ)

生態

【分布】 数十年周期で資源水準が大きく変動し、それによって分布範囲が異なる。低水準期には日本各地の沿岸域。高水準期には日本近海を中心に東シナ海、オホーツク海などにも広がる。索餌や産卵に伴う南北の大規模な回遊も見られる。



【成長】 寿命は通常7歳前後で、体長25cmくらいまで大きくなる。まれに30cmまで成長。

【成熟】 1～2歳で成熟する。春季に東シナ海から日本海の沿岸域で産卵する。

【食性】 カイアシ類や珪藻類などのプランクトンを摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に隠岐諸島のまき網により漁獲されたものが、境港へ水揚げされる。

【漁期】 まき網では、春に成魚が、秋に当歳魚が多く漁獲される。

(※通常加入期において)

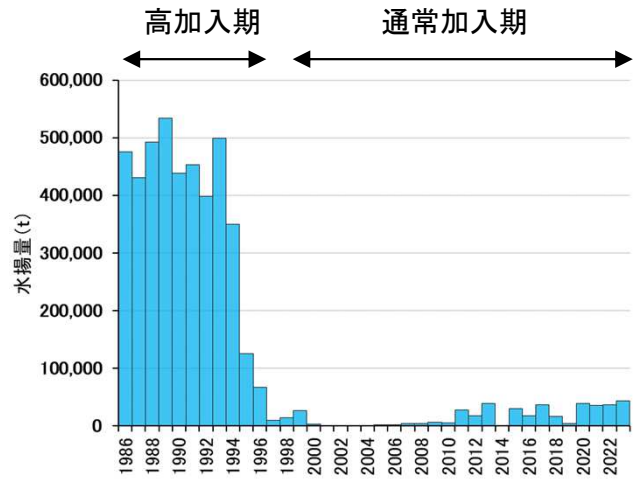
漁獲状況

高位・増加

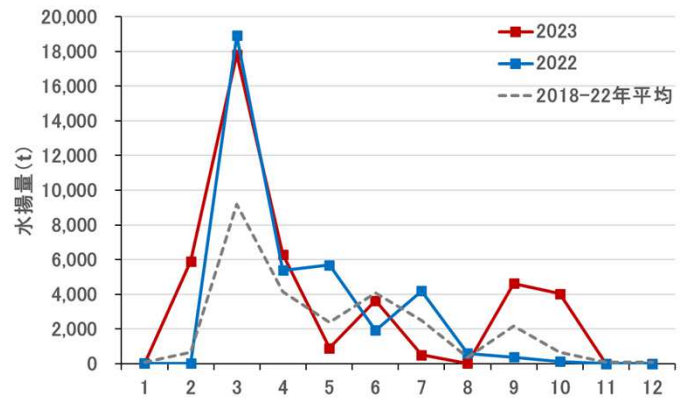


1990年代後半から資源が少なくなったマイワシ資源ですが、2011年に3万トン近い水揚げを記録し、以降は増加傾向にあります。2023年の水揚量は43,766トンで、2000年代に入って以降、最も多い水揚量となりました。

一方でマイワシは2014年の965トン、2019年の3,771トンと水揚量が大きく減少する年も存在し、この現象の解明のために研究が続けられています。このように本種は水揚量の増減が激しい魚種として知られていますが、あまりに激しい増減だと、既存の資源評価手法での対応がとても難しくなります。従って、水揚量の変化に惑わされることなく、資源動向を正確に把握するために、モニタリングの精度を高めていく必要があると考えています。



境港のまき網におけるマイワシ年間水揚量の推移



境港のまき網におけるマイワシ月別水揚量の比較

資源変動の推定精度向上のための取組み

水産試験場では、1980年からイワシ類の卵と稚魚のプランクトンネットによる採集調査（卵稚仔調査）を行っています。また、2012年からニューストーンネットによるマイワシ新規加入量調査を行っています。

これらの調査により、マイワシの研究が着実に進められているのですが、卵や稚仔の数は年変動が大きく、環境変動による生き残りも影響を受けやすいことから、これまでの情報だけでは、資源変動の予測が難しいのが現状です。

そこで、令和3年から表中層トロール網を用いて、幼魚（体長約10cm程度）の採集を試みっていますが、残念ながらマイワシ幼魚は採集できていない状況です。令和6年度において当調査は実施しない予定ですが、今後も調査時期や海域を検討し採集を目指します。



ニューストーンネット
(網口幅1.3m、海面を曳網)



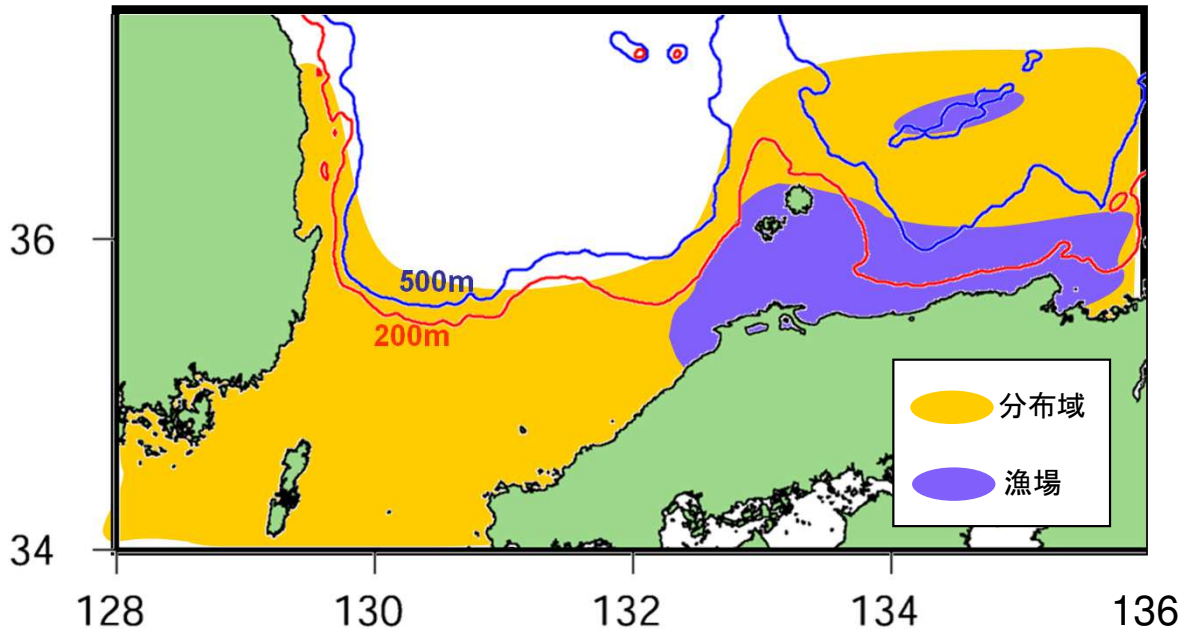
表中層トロール網
(網口幅12m、水深10~30m層を曳網)



ブリ (地方名 (出世魚) つばす→はまち→まるご→ぶり)

生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域 (よく似たヒラマサは全世界の温帯・亜熱帯に分布)



【成長】 寿命は7歳前後で、大きなものは尾叉長115cm、20kg以上に成長する。
成長は早く、1歳で40cm (1kg)、3歳で70cm (4.5kg) 程度まで大きくなる。

【成熟】 概ね3歳で成熟する。産卵場所は東シナ海の大陸棚縁辺部が中心と考えられている。産卵期間は長く1～6月まで続く。

【食性】 稚魚は初期にはカイアシ類などの動物プランクトンを摂餌し、3cm程度に成長すると魚類を食べ始める。13cm以上になると、カタクチイワシ、スルメイカなどの魚介類を主体とするようになる。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に沖合の大中型まき網により漁獲される。沿岸においても刺網、定置網、一本釣により利用されており重要な魚種となっている。

【漁期】 まき網では、12～翌1月に多く漁獲される。沿岸ではやや小型 (5kg未満) のものが周年漁獲される。

漁獲状況

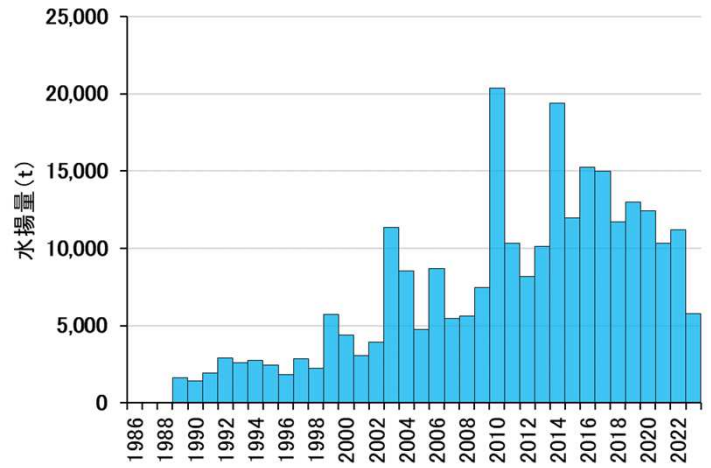
低位・減少



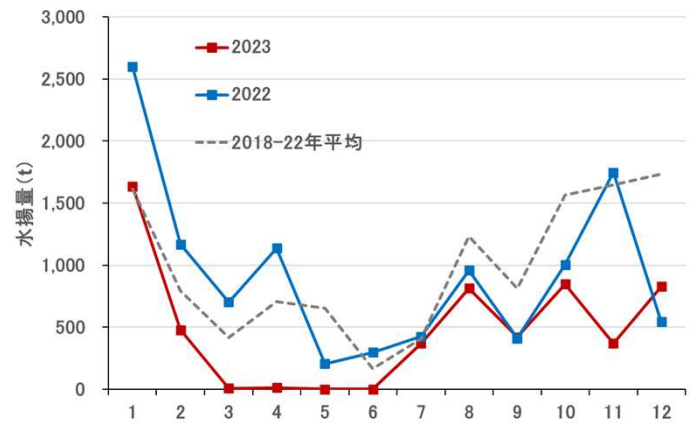
水揚量は2000年代以降は増加傾向が続いていましたが、2023年は5,795トンで、前年比51%・
 平年比49%と大きく減少しました。

例年単価の上昇する12月にかけて水揚量が多くなる傾向があったのですが、今年の水揚量が増加しはじめる夏以降、各月で水揚量1,000トン
 を下回り低調に推移しました。また、昨年と比較しツバス銘柄の水揚量が少なかったことも今年の特徴として挙げられます。

ブリは令和3年度から新ルールでの資源評価が始まり、令和5年度評価において親魚量はMSYを実現する水準を下回るとされています。今後も資源動向を注視していき、モニタリングを継続する必要があると考えています。



境港のまき網におけるブリ年間水揚量の推移

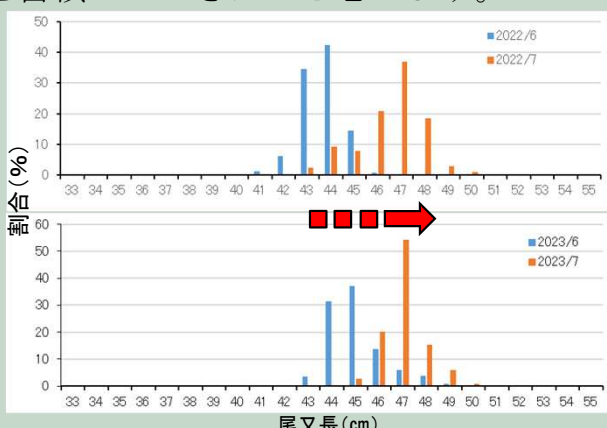


境港のまき網におけるブリ月別水揚量の比較

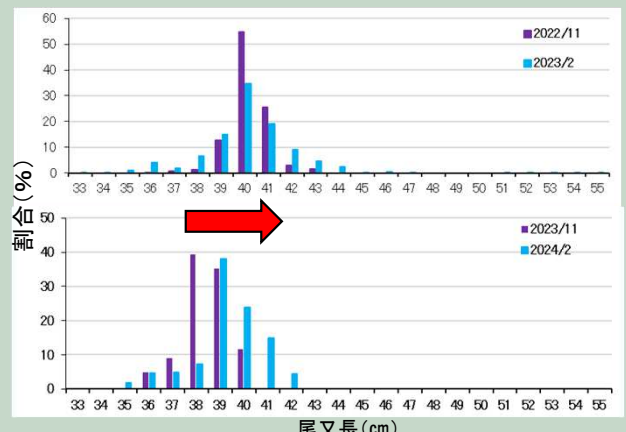
令和4年度からブリの市場調査を継続しています

ブリは上述の通り、令和3年度から新ルールでの資源評価が開始され、令和7年度からはステップアップ方式でのTAC管理が開始されることが、アナウンスされています。

水産試験場では、令和4年度よりブリ類の市場調査・魚体測定などの基礎的な調査を実施しています。その成果として下のグラフに示すように、月ごとの各年級群の成長を追うことができ、資源評価の精度向上に必要不可欠なデータを収集することができるようになってきました。今後も調査を継続し、適切な資源管理を実施できるようにデータを蓄積していきたいと思えます。



刺網のハマチ銘柄の体長組成(6~7月)



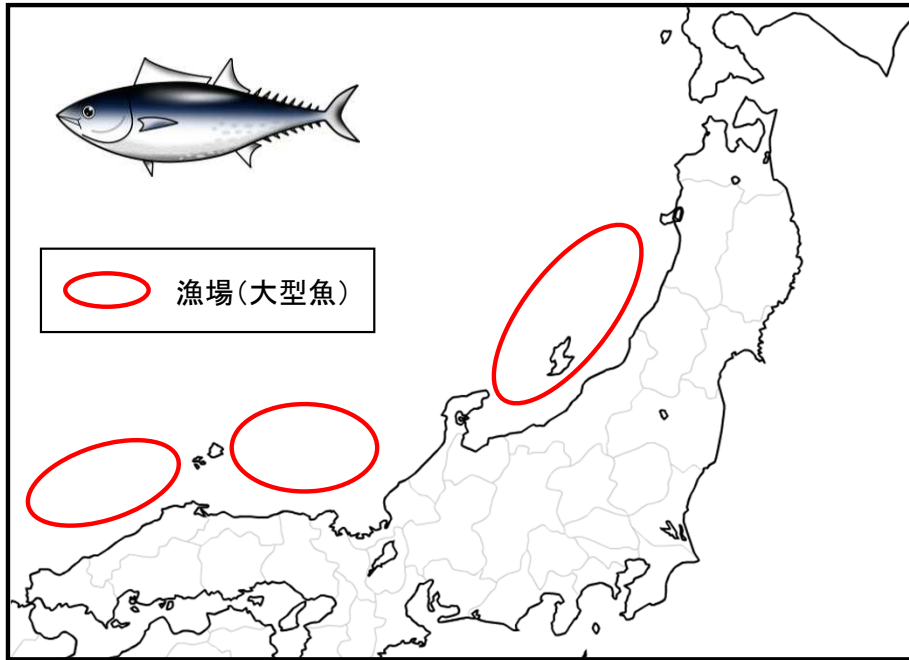
刺網のハマチ銘柄の体長組成(11月、2月)

クロマグロ (地方名 まぐろ、本まぐろ)



生態

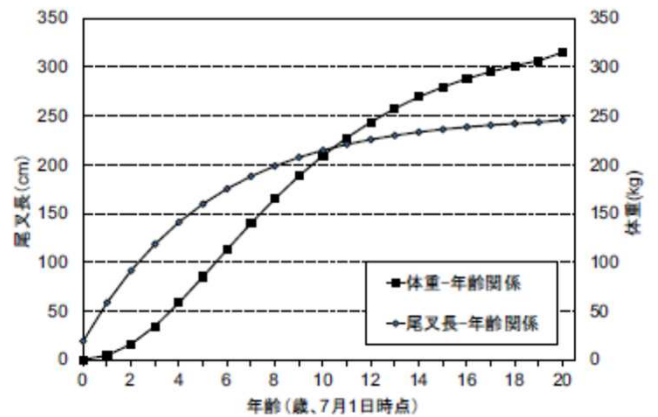
【分布】 日本周辺をはじめ、太平洋の温帯域に広く分布する。



【成長】 寿命は20歳以上と言われ、最大のもので体長が3m、体重400kg近くまで成長する。

【成熟】 体長1mを超える3歳頃から成熟が始まり、日本南方～フィリピン沖では4～7月に産卵し、日本海では6～8月に産卵する。

【食性】 日本海では、スルメイカやカタクチイワシなどの小型浮魚類を食べていることが多い。



太平洋クロマグロの尾叉長・体重と年齢との関係 (令和2年国際漁業資源の状況 水産庁・水産研究・教育機構より)

漁業の特徴

【漁法】 大中型まき網で漁獲され境港に水揚げされる。

【漁獲量・漁期】 TAC (漁獲可能量) 管理魚種であり、漁獲上限が決められている。大中型まき網による日本海区の大型魚 (30kg以上の成魚) は、2022年から漁業法に基づくIQ管理 (漁獲割り当て) となり、各船団に漁獲量が配分されている。

大型魚の漁獲可能量 (IQ管理) : 1,800トン
管理期間 : 5月15日～7月31日

漁獲状況

中位・横ばい



・2023年の境港におけるクロマグロの水揚量は大型魚（30kg以上の成魚）が1,099トン（前年1,075トン）、小型魚（30kg未満の未成魚）のヨコワが10トン（前年12トン）でした。

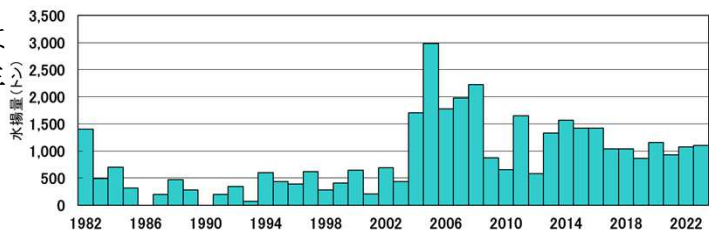
・6～7月に漁獲された大型魚の組成は、尾叉長（体長）130cm（体重36kg；推定4歳）、152cm（体重60kg；推定5～6歳）、172cm（体重94kg；推定7歳以上）に少なくとも3つの明瞭なモードが確認されました。

・近年、比較的に境港の水揚量は安定していますが、太平洋クロマグロの資源は低位にあるため、2014年の中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）の決定により国際的な保存管理措置（※）が講じられています。

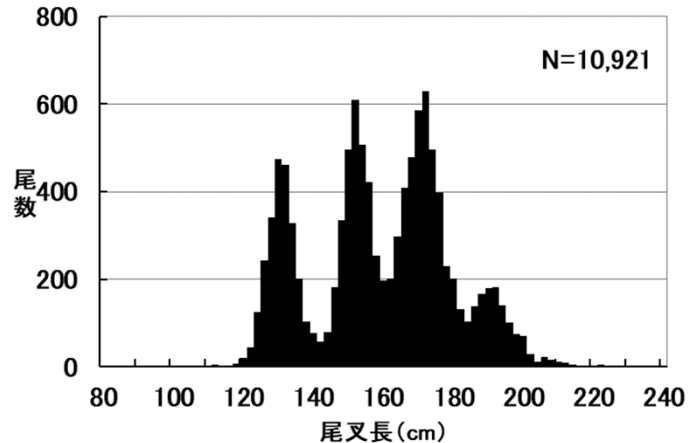
※小型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から半減。大型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から増加させない。

・この関係者による資源管理の取り組みにより、太平洋クロマグロ資源は順調に回復し、2020年の太平洋クロマグロの親魚資源量は約6.5万トンと見込まれており、暫定回復目標（約4万トン）を5年早い2019年に達成し、次期回復目標（約13万トン）も2023年に達成した可能性があると見込まれており（解析中）、資源回復の速度は、加速しています。

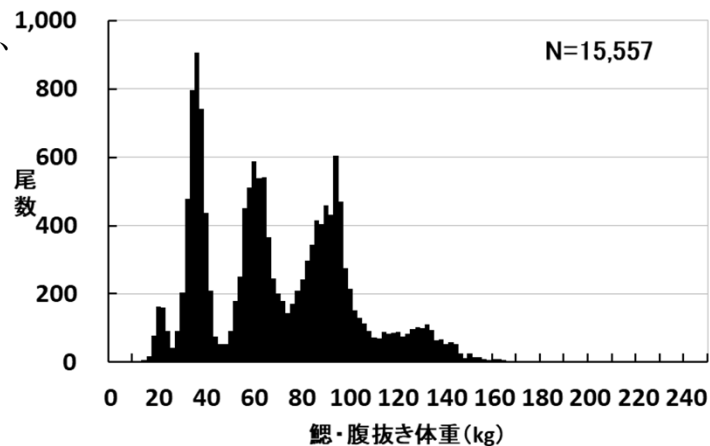
・2024年の境港の見通しですが、水揚量は、TAC枠上限まで水揚げされ、前年並みとなる見込みです。また、サイズは、大型化が定着し、5～6歳魚が中心となる見込みです。



境港のまき網におけるクロマグロ水揚量の推移 (大型魚)



尾叉長(体長)組成(2023年大型魚)



体重組成(2023年大型魚)

資源を大切に使うための調査や取り組み

水産試験場では、市場へ水揚げされたクロマグロの体長測定や産卵状況を確認するための卵巣組織採集を行うとともに、平成22年度より、国や他県と共同で仔魚調査（ネット曳きによる生まれて間もない仔魚採集）を行い、生残過程等を調べています。



クロマグロの仔魚
(H22年7月
試験船第一鳥取丸で採集)



市場での体長測定

イカ釣り漁業の概要

夜間に集魚灯に集まったイカを自動イカ釣り機により擬餌針で釣り上げます。

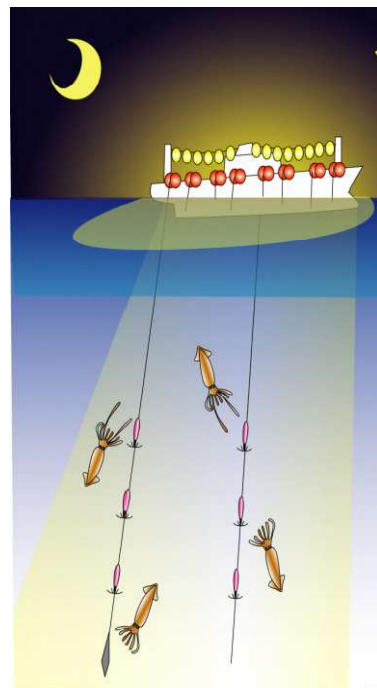
沿岸で日帰り操業する10トン未満漁船と、イカの回遊にあわせ日本海各地で操業する19トン型漁船があり、本県沿岸域でも夜間に陸から海を眺めると操業するイカ釣り漁船の灯り（漁り火）で幻想的な光景が見られます。

【魚種】 スルメイカ、ケンサキイカ（白いか）

【漁場】 10トン未満漁船→鳥取県沿岸

19トン型漁船（小型イカ釣り漁船）

→東シナ海及び日本海全域



現状の課題と解決に向けた取り組み

イカ釣り漁業は、大きな集魚灯を利用して操業しているため、他の漁業より燃油を多く必要とし、燃油価格の高騰が漁業経営を圧迫しています。また、近年、漁場が沖合域に形成される傾向にあり、沿岸域に漁場が形成されにくくなっています。

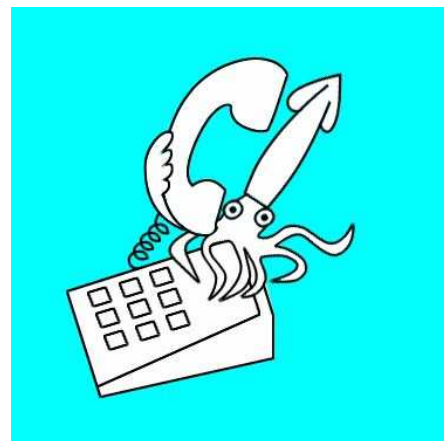
鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖を北上する春と南下する秋～冬に第一鳥取丸を用いてスルメイカの漁場探査調査を実施しています。そして、調査結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。

電話で情報をゲット！！

漁業者に他県の水揚げ状況を知って頂くために、電話応答専用の「白いか（ケンサキイカ）、しまめいか（スルメイカ）漁況案内」を行っています。白いかは、長崎県及び兵庫県の水揚げ状況をお知らせしています。しまめいかは、境漁港の水揚げ状況をお知らせしています。

電話番号

0859-45-4505

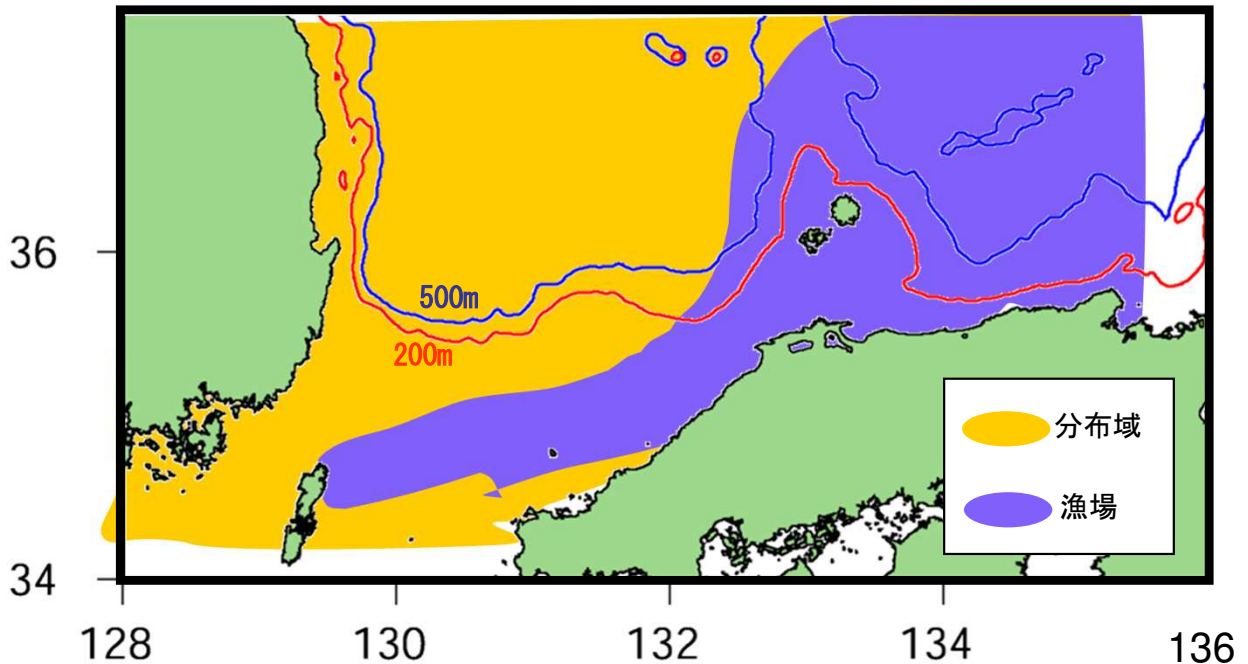


スルメイカ (地方名 しまめいか)



生態

【分布】 日本周辺に広く分布しており、主に日本海側には秋生まれ群が太平洋側には冬生まれ群が来遊している。



【成長】 寿命は約1年で、大きいもので外套背長約30cmまで成長する。

【成熟】 雄は約9カ月、雌は約11カ月で成熟する。

系群	産卵期	産卵場	主漁期
秋季発生系群	前年10～12月	北陸沿岸～東シナ海	3～12月
冬季発生系群	前々年12～前年3月	主に東シナ海	1～2月

【食性】 動物プランクトンや、キュウリエソ等を食べる。

漁業の特徴

【漁法】 主にイカ釣りにより漁獲される。

【漁期】 日本海では1月～3月上旬は前年の冬に生まれ、主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲される。また、3月中旬以降は前年の秋頃に生まれ、日本海沿岸部を北上、10月以降に主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲される。

3 漁獲状況

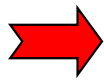
鳥取県船（10トン未満漁船、19トン型漁船）の漁獲量はスルメイカが556トン（前年比99%）で漁獲金額は5.7億円（前年比129%）となりました。

境港のスルメイカ水揚量は2002年まで高い水揚げが続いていましたが、近年は減少傾向に有り、ピーク時の1/10以下となっています。

2023年の境港における水揚量は350トン（前年比249%、平年比161%）で前年と平年を上回りました。月別の水揚量では近年主漁期となる1～2月は低調に推移し、9～10月に前年と平年を大きく上回る水揚げが認められました。

近年の低調傾向は日本海地区全体で認められ、回遊経路が漁獲好調期から変化したことなどが原因だと考えられます。また、産卵時期の変化を示唆する研究報告も認められており、今後、来遊時期や魚体のサイズが変化する可能性があります。

秋生まれ群

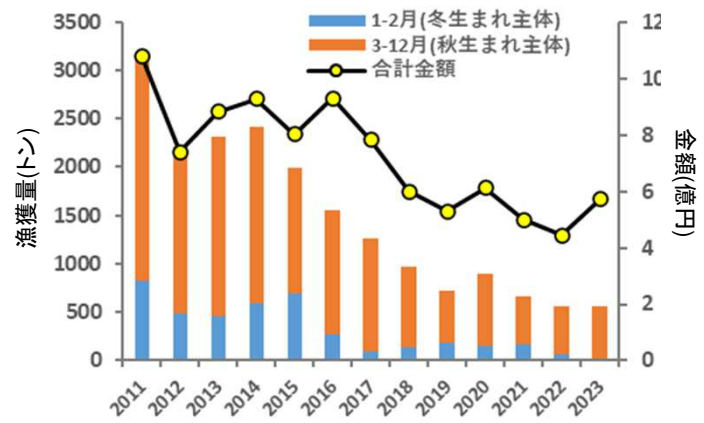


低位
・横ばい

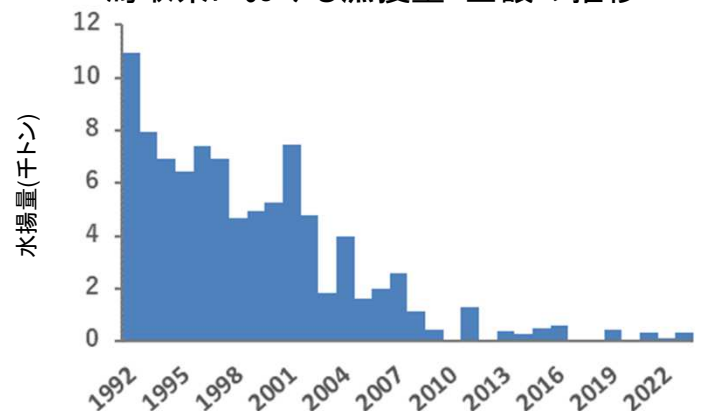
冬生まれ群



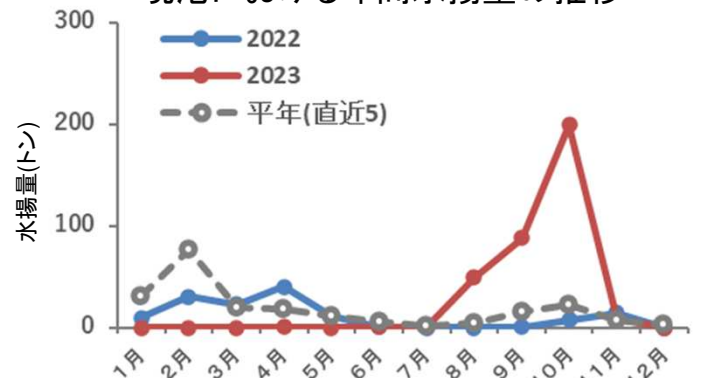
低位
・減少



鳥取県における漁獲量・金額の推移



境港における年間水揚量の推移



境港における月別水揚量の比較

4 資源を大切に使うための調査や取り組み

イカ釣り漁業は燃油価格高騰の影響を強く受ける漁業です。また、上記に加え、スルメイカの資源量減少、漁場の沖合化によりイカ釣り漁業は非常に厳しい状況にあります。

鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖に来遊する春と秋に、第一鳥取丸を用いたスルメイカの漁場探査調査を実施しています。釣獲したスルメイカから、分布密度や大きさを調査し、結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。



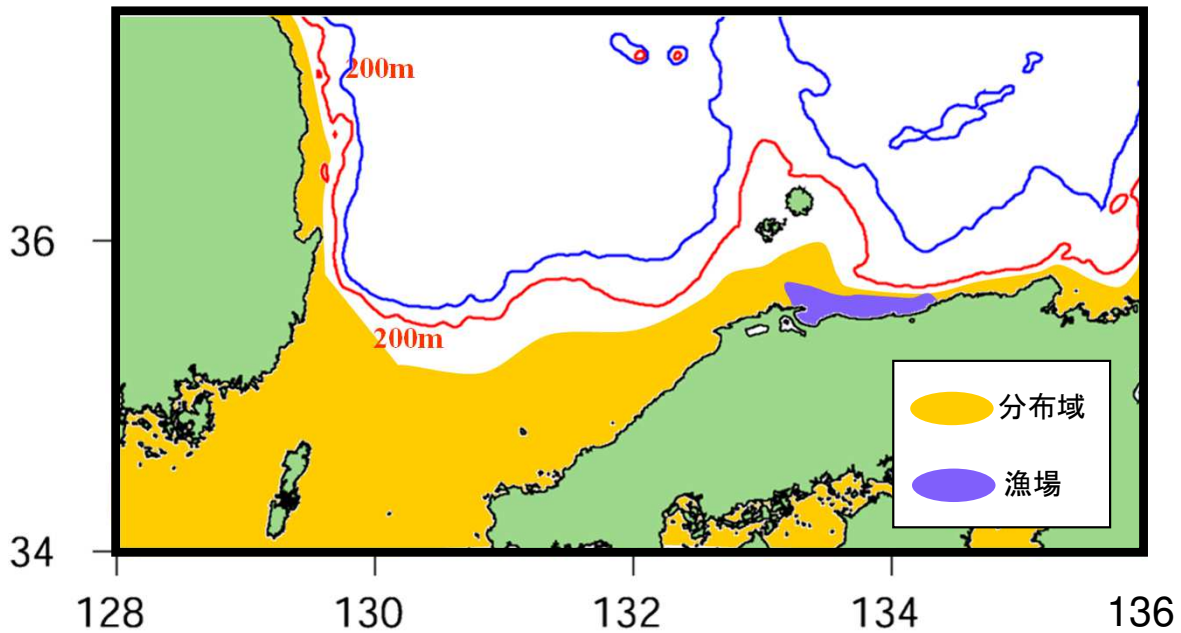
漁場探査調査中の測定風景

ケンサキイカ・ブドウイカ (地方名 白いか)



生態

【分布】 青森県以南の本邦沿岸、韓国、東海、南海に分布している。



【成長】 寿命は約1年で、雌の最大外套背長は41cm、雄は50cmまで成長する。

【成熟】 外套背長7～8cm（月齢約5カ月）程度から成熟個体が出現し、外套背長20cm前後（月齢約8カ月）でほぼ半数が成熟する。

【食性】 小型の魚類、甲殻類、軟体類を食べる。

漁業の特徴

【漁法】 秋までは主に手釣り、それ以降イカ釣（機械釣）により漁獲される。

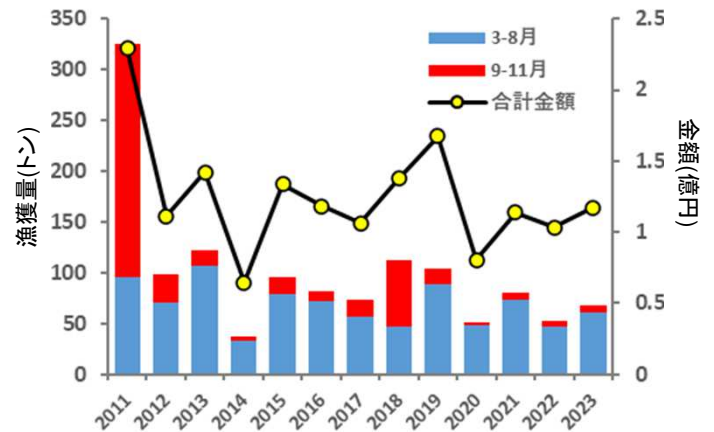
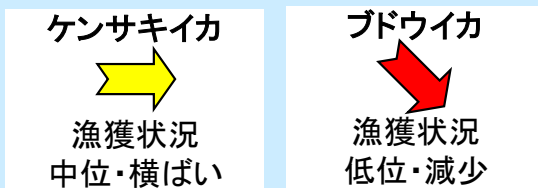
【漁期】 4、5月から漁獲が開始され、初期には沿岸寄りの水深20～40m付近に漁場が形成され、月を追って次第に沖合へと漁場が移り、秋には水深80～100mの海域が主漁場となる。

3 漁獲状況

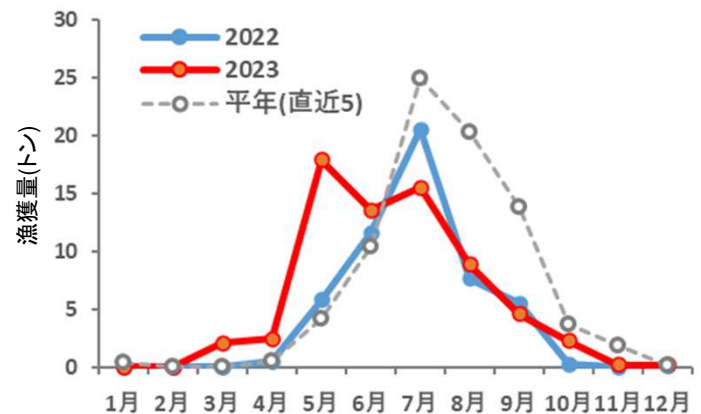
2023年の3月から12月における鳥取県船（10トン未満漁船）のケンサキイカ漁獲量は68.1トン（前年比130%）、漁獲金額は1.2億円（前年比113%）となり、漁獲量、漁獲金額ともに前年を下回りました。

2023年の月別漁獲量は、5月に前年と平年を上回り、以降は概ね平年を下回り低調に推移しました。2023年における漁獲の主体となったのは、主に夏季に漁獲されるケンサキイカだと考えられ、3月～8月の合計漁獲量は平年（直近5年）比99%でした。8月下旬以降に漁獲されるブドウイカ（ケンサキイカの季節型）は、前年に引き続き来遊量が少なかったと考えられ、9月～11月の合計漁獲量は平年比37%を示し、低調でした。

ブドウイカの不漁は、2020年から継続的に認められており2023年もブドウイカの資源状態が減少傾向にあると考えられます。



鳥取県における漁獲量・金額の推移



鳥取県における月別漁獲量の比較

4 資源を大切に使うための調査や取り組み

ケンサキイカ（白イカ）は沿岸漁業の生産金額上位5種に入る重要魚種ですが、近年、その漁獲量は減少傾向にあります。これまで水産試験場、栽培漁業センターと共同で、白イカの付加価値向上を目的に、活イカ出荷の技術開発、普及等を行ってきました。しかし、2014年の不漁を機に、県内の活イカを扱う飲食店は、山口県からの購入ルートを構築し、県産活イカの需要が低下しました。

そこで、イカ後進県の鳥取県を売り込み、新たな付加価値向上を図るため、新たな出荷方法によるブランド化を目指して、漁業者の協力のもと、イカの墨袋を除去する技術開発を行いました。2016年には、墨袋除去技術のマニュアル化と講習会等での技術指導を行い、技術普及を図るとともに、試験販売を行い、単価向上効果を確認しました。この結果から、ブランド化に資すると判断されたため、2017年から鳥取墨なし白イカ『白輝姫（しらきひめ）』の名称で販売が行われています。

さらに、この墨袋除去技術を生かし、仲買などから要望の多いコウイカなどの墨止めの技術を開発、「墨止めコウイカ」の販売も行われています。

